

Mi piace molto la lingua italiana イタリア語大好き

「ローマ方式」人間賛歌

イタリア語科同窓の特色とは？

往年の名画「ローマの休日」。原題は「Holiday in Rome」ではなく、正しくは「Roman Holiday」

この「ローマン」という点がニクイ。「虚飾や因習を排し、人間解放の賛歌」をうたい上げる。名画が訴えるこれが「ローマ方式」なのだ。イタリアの特色を語るときなんと象徴的であろうか。わがイタリア語科を語るときも。

そして21世紀を歩みだしたいま、首都圏にはイタリア語が花ざかり、やれオペラだパスタだジェラートだ、顔にナンニーニ、胸にアルマーニ、手にプラダ、足許はフェラガモで決めて、ミラネーゼ、シロガネーゼ、エグゼリーナと世はあげて「イタリア大ブレイク」の観を呈している。書店の雑誌売場を見ても、Tanto, Oggi, Domani, Vivace, Grazia, Uomo, Vita 等々、



映画「ローマの休日」 提供オリオンプレス

日常伊語が「たん」と誌名に供されている。街角のカフェでは、エスプレッソ、カプチーノが急速に普及。Bravo!

戦中戦後、あの未曾有の「暗黒時代」を思えば隔世の感しきりだが、いまイタリア科百年の歴史を振り返ってみると、同窓同学の皆さん、各分野で、ひるまず臆せず、個性豊かに、歴史に刻すべき実に「立派な仕事」をされている。なかでもシリウスにも似たスケール壮大な功労者の存在は、特筆に価しよう。

元衆院議長益谷秀次（F明42）、元衆院議員福永一臣（S昭8）、国政レベルの政治家を別格とすれば、勲一等の荣誉に浴したの、東京外語百年の歴史の中でイタリア科出身の2名のみ。即ちNHK前田義徳（昭2）と旺文社赤尾好夫（昭6）である。

叙勲制度の是非はこの際措くとして同門の徒としてはこの厳肅なる事実を素直に喜びたい。

「世界はローマから」「すべての道はローマに通ず」 千古かく言われるのも、故なしとしないようだが、イタリア語学習の動機は、もとより一様ではない。彫刻家高田博厚は岩田豊雄（獅子文六）に勧められたのがきっかけと聞くし、評論家長谷川如是閑は、斯界の権威ベッカーリーア刑法学を学ぶため、作家の杉浦明平はルネサンス文学を原典で読破するためだった。

注：高田は中退。長谷川、杉浦は夜間特別科終了

創設百年、イタリア語科同窓生の数も、ざっと千四百名を凌ぐ。その人生模様を膨大な資料から渉獵するとまさに多士済々、山なみ連なる群像は万華鏡さながらに多彩な映像を楽しませてくれる。なかには条件のよい就職口さえ袖にして、主婦業をまっとうする構えのOG軍団。だが、「無冠の人生」こそ、真の人間記録に価するというべきかも。歴史なるもの、束帯姿とはおよそ無縁なカサリンガ（主婦）が陰でしっ

かと支え、創造してきたのだから。麻酔薬を創案した外科医、かの華岡青洲とその妻の身命を賭した生きざまを思えば明快ではないか。

そう言えば、43歳の名もなき「無冠」のサラリーマンがノーベル化学賞に輝き、旧来の退屈な「常識」を覆した。わが「ローマ方式」にどこやら通底していると言えないだろうか。

マスコミ関係（ノーコメントを大スクープ）

代表格は前田義徳（昭2）。NHK会長職を3期



前田義徳

9年。昭26年講和条約時、サンフランシスコ駅頭でソ連のグロムイコ全権をゲット。単独取材をものにした。テキは沈黙を通すハラで、出てきた言葉が「ノーコメント」これがビッグニュースとなり、たちまち流行語に。半世紀後、今も

定着している。グロムイコを知らなくとも、この言葉を知らぬ人はいないだろう。

産経の東川（とがわ）一郎（昭16）も「位人臣を極めた」一人。外語野球部の育ての親としても知られる。イタリア会の現会長。超人的行動力で見事な推進役だ。昇天を急いだNHKの末常尚志は「軟派の磯村」に対して硬派の白髪キャスターとして男性ファンが多かった。同期（昭30）の井草隆雄は毎日にヘッドハントされる前、警視庁クラブ詰めが長く、人気番組「事件記者」の伊那ちゃん役のモデルだったし、西武系「パルコ」の名付親としても話題を呼んだ。

出版界は赤尾好夫（昭6）が知名度バツグン。昭60年、78歳で他界。朝日「天声人語」にさっそく登場。受験教育界のパイオニアとして、いかに起業し、育てたか、ベンチャーの開祖ぶりや思考の柔軟ぶりなど、人気コラムのすべてを供してその死を悼んだ。

変わりだねは、NHK連ドラのモデルになった瀬沼卓朗（昭30）。20代、集英社で漫画編集者として藤子不二雄を担当。原稿ゲット攻防戦

に明け暮れ、それが後年、光文社『トキワ荘青春日記』に実名で書かれ、やがてTVドラマ化。編集者に扮したのは、ケーシー高峰。その軽妙かつ軽薄なキャラに奇妙な啓示を受けたとか。



赤尾好夫

芸術・文学・映画（文化功労者、芥川賞）

文豪の系譜にはロシア科二葉亭四迷、シナ科永井荷風、フランス科石川淳、そして志賀直哉と親交があったイタリア科有島生馬（明37）。東京外語が生んだ「文豪四天王」と呼ぶに相応しい。大正6年「校名変更」反対運動が全国規模で拡がり、陣頭指揮した熱血漢こそ有島であった。昭39年、氏は栄えある文化功労者に。

彫刻家高田博厚、抽象画の高橋久（昭21）。越智敬（昭34）はマンドリン奏者として世界的に活躍。記録文学『ノリソダ騒動記』で人気を博した杉浦明平（昭11）は、外語で長時間講演。廊下に溢れる盛況であった。講演の司会役を務めたのが瀬沼卓朗。氏は「新潮」等に小説を発表しながらも修羅の森でダンテの亡霊にとりつかれ幽玄の詩人に。詩華集の常連だ。ほかに現役作家として、朴重鎮（昭35）、森詠（昭43）、沢井繁男（昭54）、大岡玲（昭58）。大岡は若くして三島賞と芥川賞を手にし、いっぽう美術評論家としてNHK「日曜美術館」にレギュラー出演。

戦後ロッセリーニ等イタリアン・リアリズムが一世を風靡した。映画関係とイタリア科は相性がいい。イタリフィルム社を創設したストラミジョーリ女史は外語の講師を永年勤め、黒沢の「羅生門」を世界に紹介した功労者。ベネチア映画祭に出品すべく、女史と加藤亨（昭25）は夜を徹してイタリア語の字幕スーパーを打ち込み、羽田へ急行。「RASHOMON」は空を翔んだ。かくして世紀の一大快挙は生まれたのである。だが、グランプリ受賞以前の国内の評価は、およそ芳しくなかった。「芸術性」が理解されなかったのだ。女史の炯眼に脱帽！

この女史に、とんでもない一矢を放った暴言事件がある。黒板の前に立つ後ろ姿にむかって

「でかいケツだなア！」 女史の応答がよかった。「イタリアの女は尻が大きいのです」

このケツサクな猛者は伊藤基道（昭32）、伊藤はイタリア書房を創り、育て、いまは同門の長男伊藤道一（昭61）に代表権の座を譲っている。

映画関係者は、杉岡延治、吉村信次郎、松尾朗、黒沼俊子、富永謙一、等々、少なくない。

森美南子（昭42）は平成晴耕雨読を楽しんでいる。茨城にあって本格百姓仕事に精をだし、出荷作業も嬉々としてこなす。「にがい米」のマンガーノばりだ。雨の日は、字幕スーパーの翻訳者に変身。農婦と字幕翻訳 類型を脱した今日的な「一典型」と言えようか。

学術・研究（愛すべき「サルトル」先生）

かのジャン・ポール・サルトルは、知られざる愛煙家だった。高校教師時代、なんと授業中生徒にタバコをすすめたという。わがイタリア科の奥野拓哉先生（昭8）も然り。期末試験の教室で「きみたち、よかったらタバコやんなさいよ。ぼくは失敬して…」とスパスパ！「もち合わせないなら、ハイどうぞ」とめぐんでもくれた。これぞ「ローマ方式」ではなかるうか。

特別奨学金に浴した「秀才」荒谷次郎（昭30・大阪外語大名誉教授）は、学問・酒、ついでに色の道を極めた。「殺されても死なぬ」はずだったが、無断で突然、黄泉路へ旅立った。

語学の雄が秋山余思（昭29）なら、文学の雄は河島英昭（昭34）、イタリア文学者として一頭地をぬく存在。ほかに、窪田富男（昭28）、古賀弘人（昭46）、竹山博英（昭48）らが「濃密な仕事」を残している。中川十郎（昭34）は転身の雄。55歳で商社から学者へ。東京経済大学教授として、朝日紙上などで論陣を張っている。演劇評論で声望の高い田之倉稔（昭36）は、ピエロの研究では世界的権威。ムッソリーニ研究家として知られる木村裕主（昭23）、ダンテ研究を畢生の仕事に課す岡戸久吉（昭29）等々。その他、研究一筋篤学の土は随所に根を張り、各々開花、結実。

田丸公美子（昭47）は、同時通訳の雄。歴代の首相はもとよりフェリーニ、マストロヤンニら第一級のVIPを体験。終始、緊張とスリルの連

続とか。目下「後継者の育成」が急務の由。

商社・外交関係（イメルダ夫人が夜襲？）

大手商社と外交の世界は密接な関係にあり、あざなえる縄の如きか。自然界は飛躍しないのが原理だが、市場経済の宿命的な矛盾はいかなる未来図を描くのか。さて、当分野の同窓は夥しい数にのぼる。海外雄飛の全足跡を克明に辿れば、ゆうに数巻の書を徴するだろう。

「物産のドン」大島恒男（昭14）は日本人ばなれの長身。ミラノの店でズボン採寸の折、股下85（オットンタ・チンクエ）と言われ、反射的に「俺、たつてないよ」 周辺ではイチオシの奇譚。ときに氏は85歳に！至って壮健である。チンチン（乾杯）！一方、短軀ながらエネルギーな清水透（昭30）は「イタリア商事（株）」を創業、圧力鍋や生ハムで基盤を築いた。パスタの元祖・ご存知「文流」の西村暢夫（昭31）は手広くイタリア食文化の普及に貢献。

さて外交官は？ 田辺健（昭17）は在伊22年、ミラノ総領事のあと日伊協会で文化交流の実をあげ、現在イタリア会副会長。林要一は大使を最後に退官したが、いまなお滞伊。ラテン語研鑽の旅路で、時に「ガスマン・レツジェ・ダンテ」なるビデオを楽しむ。名優ヴィットリオ・ガスマンが、幽玄の煉獄を歩む風情で迫真の亡霊演技を見せながら、ダンテの『神曲』を重厚な声で朗読するという貴重な逸品である。優雅なローマンライフといえようか。

世紀の悪女アニータにいれこんだ不埒な男の名は千田某。全く無関係だが、千田剛（昭30）は公使を拝命するまえ、NYで世紀の奇縁を体験する。氏のアパートに深夜珍客が訪れた。たれあろう、マニラを追放されたあのイメルダ夫人ではないか。彼女はフロアをひとつ錯誤したらしいのだが、もし室内に招じ入れていたら...？ 知るか！ 不毛な妄想は、サクランを招く。

「人間解放」「生きる喜び」の発見

かの女優キャサリン・ヘップバーンの名作「旅情」は忘れ難い。イタリア観光中、地元ハンサム男のナンパ台詞も記憶の底に。「たまには変わった食事をしてみませんか」 意

気投合した二人は、たちまち人間解放を謳歌、「生きる喜び」をマンキツする。

イタリアに魅せられた歴史的な文豪は少なくない。ゲーテ、スタンダール、バルザック、ミルトン等々。特筆に価するのはシェークスピア。一度もイタリアの地を踏んだことがないのに、『ロミオとジュリエット』など、イタリアを舞台にした戯曲は十指にあまる。

ダ・ヴィンチやミケランジェロの芸術に圧倒されるもよし、ヴェルディやプッチーニの世界に魅せられるもよし。だが、裸足で飛びまわらんげないワルガキ。どなり散らす尻デカ女。

そのようなローマの裏町をこよなく愛したフェリーニ。いまでも映像の巨匠はカリスマ的存在。学校嫌いで寄席芸人だったその経歴は、ゆくりなくも、海外でも人気を博す北野たけしのイメージに重ってくる。

そう言えばイタリア語で一人芝居を演じてみせたタモリの至芸は国宝級。裏町の干し物描写から悪たれガキと孕み女の壮絶な罵り合い…。むろんタモリ流のインチキ伊語だが、音感の天才は、リズムや抑揚を誇張、見事な話芸を披露した。パーティに並みいるイタリア紳士淑女にバカ受け。まさに国際親善の桃源郷であった。

「ローマ方式」はもとより純粋な人間性と自由を追求する。イングリッド・バーグマンが北欧の家庭を捨てて、イタリアの大監督ロッセリーニのもとに走った壮挙はあまりに情熱的。ジョン・レノンとオノ・ヨーコの場合も然り、名曲「イマジジ」は永遠なる叫びなのだから。

スポーツの世界も国際交流が日常になった。サッカー中田はいまやイタリア語を自在に！今は昔、蹴球は死語となり、セリエAはエイではなくアーであることはサポーターならずともジョーシキ。中田の流暢なイタリア語は茶の間でも知られ、一方サポーターも負けていない。日本女性のオッカケもいて「ナカタ、ナカタ、アンディアーモ！」黄色い声を空に翔ばす。

キャンパスも様変わり。在校生は1年生35名、2年生36名、3年生36名、4年生43名。昭和56年の入学生は男女ほぼ同数になり、次第に

女子は漸増カーブ、男子は少数派に。ちなみに現在数は女子およそ70%。丘は花盛り、というべきか。

ざっと千四百名をしのぐ同窓地図を鳥瞰すると、奇妙な緊張と刺戟に襲われる。夥しい人数の呪縛をいかに処理するか。「ローマ方式」の人間賛歌にテーマを絞り、傑作エピソード、珍談奇談を渉獵した。それでも全体像から見ればほんのヒトツマミに過ぎないだろう。肝要なのは、一世紀に及ぶその心象風景を抉ることではないか。マタハリみたいなスパイにこそなれなかったが、イタリア語を専攻したのは結果として「当り」だったという石川啓子さん（昭54）の述懐を結論としたい。まさに「当り」は実感であろう。陽気で奔放なラテンの血に乾杯！

本稿作成にあたり、イタリア会の東川会長、茂木幹事長、幹事諸兄姉、朝日新聞東京本社、内閣府賞勲局、旺文社社長室、外語百年史資料室、前田義徳令夫人、現教官・林助教授、山本講師の取材協力に預かった。関係各位に心より謝意を表します。（文責）瀬沼卓朗（昭30）（参考資料）「東京外国語大学史」イタリア篇「東京外語イタリア語科同窓百年史」

付記

なお親睦団体のイタリア会は、明るく開放的で、晩餐会や温泉旅行に他語科の方も参加されています。あなたも、いっぺんいかがですか。どうぞお気軽にお問合せを。瀬沼卓朗あて

電話：03-3926-5588 Fax：03-3926-5592



恒例の温泉旅行(箱根)